

シンガポール華人の子ども達の言語教育と言語習得

Language Education and Language Acquisition in Singapore Chinese Children.

高橋美由紀

Miyuki TAKAHASHI

Abstract

This paper is intended as an investigation of the effect of bilingual education and language use by the complex language environment in Singapore. To investigate this study, I conducted a case study involving Chinese children in Singapore. Much research and many questionnaires have been carried out on this study.

Language Education has always been one of great issues in Singapore since the country was founded. Presently, in primary and secondary school, both English and Ethnic language education are enforced as the Government's language policy in Singapore.

For example, Chinese, who account for 77% of the population of Singapore, have to study English and Mandarin at school. However, some of them speak a Chinese dialect with their family members and relatives at home because their grandparents and older people can not speak both English and Mandarin. For children, it is very hard to master more than two languages, but most children can gain a command of many languages which they have learnt and acquired.

キーワード

子どもの言語教育、バイリンガル教育、シンガポール

0. はじめに

多民族・多言語国家のシンガポールでは1965年の分離・独立以来、政府は言語教育政策を重視した英語と民族語の二言語教育政策を実施している。そして、この二言語教育を初等教育段階から効果的に行うために、政府は試行錯誤を繰り返しながら様々な政策を実施してきた。

英語はシンガポールにおいて4つの公用語（英語・華語・マレー語・タミル語）の一つである。英語は多民族国家の民族間のリンガフランカとしての役割を担っているばかりでなく、行政、教育、経済、科学技術、国際的なコミュニケーションを図るための言葉として、国民が世界中の情報や知識を得るための手段として使用するための言語である（Ministry of Education: 2001a）。

しかしながら、シンガポールでは、その歴史的背景や地理的環境により、学校教育で採択されている英語と民族語以外の言語も一般社会のレベルでは使用されている。シンガポールで約77%を占める華人を例に挙げると、学

校教育において第一言語としての英語と第二言語（民族語）としての華語、さらにこれに彼らの母語である華語方言（父方の出身地で決定される）が加わる。このように、様々な民族の言語がいたるところで飛び交っており、言語環境は非常に複雑であるので、子どもたちにとって言語教育は厳しく、困難を伴う場合も多い。

本稿は、はじめにシンガポールの言語政策の変遷をたどり、英語重視の言語教育とその言語環境について述べる。次に、華人の子ども達の言語教育と言語習得についての事例研究から、英語と華語教育において効果的な子どもの二言語習得についての考察を行う。

1. 言語政策と言語環境

多民族・多言語国家であるシンガポールにおいて、「言語問題」は国民を統合するものとして常に重視されている。語学教育や教育言語を主とする言語教育政策は教育という立場よりも、政治・経済と深い関係があり、

政府が最も力を注いでいる政策の一つである。

イギリスの植民地時代、英領マラヤの一部であったシンガポールでは、英語・華語・マレー語・タミル語をそれぞれ教育言語とする学校が存在した。これらの学校において、イギリスの制度と同様の教育を行う英語を教育言語とした英語学校とイギリスの制度にならって創設されたマレー語学校が植民地当局によって設置されていた。一方、華語学校は中国の、タミル語学校はインドの学校制度・教育内容・教科書等をそのまま踏襲していた。

そして、英語学校は公立とミッション系の私立があり、マレー語学校は全て公立であった。一方、華語・タミル語学校は全て私立であった。それぞれの学校の民族構成は、英語学校は民族に関係なく子ども達を受け入れていたが、華語学校は華人のみ、マレー語学校はマレー人のみ、タミル語学校はインド人のみであった。

1947年にイギリス政府はシンガポールに自治・独立を与える計画の準備として「教育政策10カ年計画」を発表した。これは、全ての民族に平等に教育の機会を与え、初等教育（6年）を漸次無償化することであった。さらに、それまで言語・文化が異なった集団の統合を図るために、英語を共通語とした国民統合政策を採用し、英語学校以外では小学校3年生から英語を必修にすることにした。この政策によって、イギリス政府は英語学校を増設した。また、英語学校出身者は他の言語学校出身者よりも経済的に有利な立場であったために、英語学校の需要は年々増加していった。しかし、国家の約7割を占める華人にとって、宗主国の英語は、華人のアイデンティティと文化の表現としては相応しくない言語であり、植民地主義を色濃くする原因であると考えたために政治問題にまで発展した。

1955年、イギリスの主導の下で部分的に自治を移行したシンガポールでは、Singapore Trade Union Congress (STUC)の指導者であるDavid Marshallを初代のシンガポール首相に選出した。彼は、言語政策に取り組むために、立法院に議席を持つ全政党を代表する9人を委員に任命した。

この委員会では華人教育の取り扱いとその統合プロセスが検討され、'56年2月の報告で、英語学校、華語学校、マレー語学校、タミル語学校の全ての学校を平等に扱い、全ての教育言語について共通の教科書を作成することを勧告した。さらに、小学校で英語とマレー語を、中学校でこれら二言語に加えて民族語を学ばせる、三言語教育を勧告した。しかし、STUC政権は、三言語政策は教師確保の面で現実的でないとして、マレー語を除く二言語教育政策（民族語と英語）を基本政策として採用した。

1959年にイギリスの植民地政府から自治権を得たシンガポール政府は、言語政策として三言語政策を実施した。これは、'55年に全政党代表委員会のメンバーの一人であったLee Kuan Yew (李光耀)が、マレー語を重視し

た三言語教育を公約に掲げて、シンガポール自治国首相に就任したからであった。その結果、Lee Kuan Yewが率いるPeople's Action Party (PAP) 政権は、マレー語に「国語」としての地位を与え、マレー語の普及を促進するための「国語月間」のキャンペーンも実施した。1960年から国民統合政策の一環として、その年の小学校1年生から英語学校では他の三言語のいずれかを、非英語学校では英語を必修科目とした。そして、1961年には中学校でマレー語が教育言語となった。しかし、教師不足やカリキュラムの不備、学習効率が低いことなどが原因で教育成果は思わしくなく、結局これは失敗に終わった。

1963年に政府は小学校を6年、中等学校を4年、後期中等学校を2年、そして高等教育とする教育制度に統一した。また、6歳から10年間の学校教育を全ての国民が受けられるようにすることを教育政策の基本とした。そして、後期中等教育と高等教育は英語か華語のみであったが、初等教育や前期中等教育は英語・華語・マレー語・タミル語による教育課程を平等に扱い、どの教育言語で教育を受ける学校へ通うかは保護者が選んだ。

1965年にシンガポールはマレーシアからの分離独立を余儀なくされた。マレー語は国語として位置付けられたが、実際には、英語、華語、タミル語と並ぶ公用語の一つでしかなかった。そして、三言語教育は学習者の負担が大きいことから、英語と民族語の教育を行なう二言語教育政策へと移行した。

1967年、政府は二言語教育を強化する措置を講じた。第二言語を教科目として教える従来の方法を改めて、1968年の小学校1年生から、非英語学校では理科・算数を英語で教えることにした。一方、英語校では「公民（道徳・倫理）」を民族語のいずれかで教えることとした。これによって、授業時間数の約2割が第二言語で教えられることになった。さらに、1970年英語学校において、民族語で教える科目に歴史（小学校3年まで）が加えられたが、児童がこれについていけず、この政策は1年で放棄された。しかし、翌'72年からは英語学校において、第二言語で教える科目を段階的に増やす計画が実施され、'75年1月、初等・中等教育での二言語教育強化政策では、公民・歴史・地理を統合した科目、生活教育を第二言語で教えることになった。

政府は、「シンガポール人意識は、各出身民族の文化を持ち、かつ共通の基盤として英語と現代文明を持った人々の協力によって生まれる」（河部 1978:137）という方針で、学校教育を推し進めていた。そして、表1で示すように、'75年には全授業科目の4割が第二言語で教えられることになった。

また、小学校卒業試験 (PSLE) において、第一言語と第二言語の試験の比重が同等になった。しかしながら一方では、二言語教育の非効率性が検討された。PSLEと中等学校終了時の普通教育資格証明試験である 'O'

表1：小学校における第二言語の教学時間の割合

年	割合
1972年	18%
1973年	25%
1974年	33.3%
1975年	40%

小木 (1995 : 10) より筆者作成

レベルの試験を受けた子ども達の60%が言語科目に不合格であった。また、'0'レベルの試験においては、二言語の合格率は僅か19%でしかなかった。そのために、政府は子どもの学習能力に適した教育を行うために対策を講じた。そして、言語学習到達度別にコースをつくり、子どもの能力に応じた学習と言語習得を可能にするための制度を整えた。

1979年に新教育制度が導入された。この新制度は、(1) 一言語を習得し、数量処理ができることを小学校終了者の最低レベルとすること、(2) 平均及び平均以上の生徒は英語を習得し、さらに、もう一言語の基礎を学習すること、(3) 教育消耗をできるだけ少なくすること、(4) 経済生活に必要な技術を身につけること、(5) 望ましい道徳価値観を身につけること、(6) 身体的成長をはかること、を目標と掲げた。

この新教育制度により、1980年代からは、少なくとも一つの言語を習熟させることを共通の目標にし、また、

学習能力の高い子どもには第二あるいは第三の言語を学習させることにした。これによって、シンガポールは英語中心の言語政策を採用したことになった。

また、英語は経済的に有利な言語であることから、年々英語学校への入学者が増加し、他の民族語学校の入学者が激変した。1981年にはタミル学校が、1986年にはマレー語学校が廃校となった。

1984年1月、小学校新入生の99%以上が英語学校に入学したので、華語学校は'85年から新入生受け入れ停止を発表した。そして、'86年には教育言語は英語に統一された。政府は華語学校に対して、1984~1987年までの間に段階的に教育言語を英語に切り替えていくように通達した。

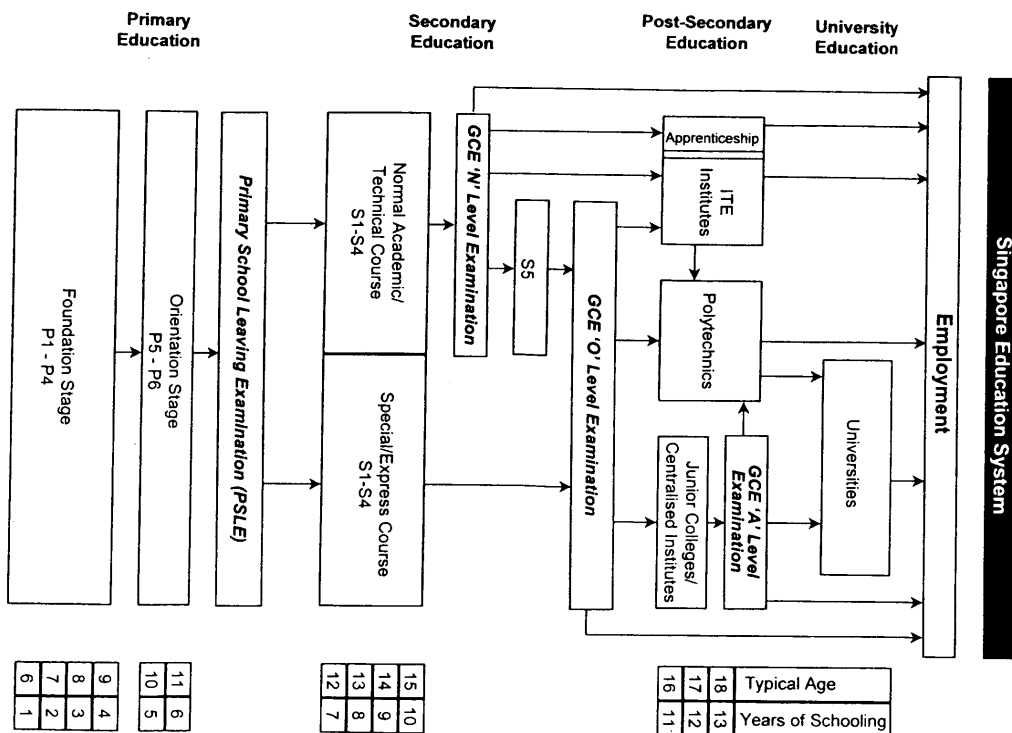
1991年の「初等学校教育改善レポート」では、英語と民族語の言語能力を評価基準として、子ども達を3つの能力別コースに選別した。これは、複線型の教育制度であり、従来の単線型教育制度が中途退学者や教育認定不合格者を生み出したことに対する解決策であった。また、教師、学習者双方の負担を軽減する効率化策でもあり、1992年より実施された。

2. 小学校における現在の言語教育

2-1. 教育システムについて

シンガポールでは教育の主要な目的を、「すべての子どもの能力を最大に引き出し、また人種、多文化国家に適応するようなモラルと文化的価値を教え、生きていくための基本的能力を養うこと」としている（情報文化省編“SINGAPORE 1990”）。

図1：シンガポールの教育システム (Ministry of Education. 2001b : IV)



シンガポールの小学校教育では、「読み書き」、「計算能力」、「二言語教育」、「体育」、「道徳教育」を柱としている。

現在、小学校は全部で194校あり、国立校が151校、国家補助校が43校である。小学校教育は2段階に分けられており、それぞれ基本段階（1年から4年まで）と、方向付け段階（5年・6年）となっている。

基本段階では、基本的なリテラシーと計算能力を重視しており、全体の授業時間数の約80%がこの教育に当てられている。英語が33%、民族語が27%、算数が20%となっている。したがって、残りの約20%で道徳教育、理科（3・4年）、社会、音楽、図画・工作、保健・体育などの授業を行っている。また、この段階の修了時（4年生）には、子ども達の英語、民族語、算数の成績によって、EM1、EM2、EM3といった3つのコースへの振り分けがなされる。

これは、子どもたちの能力別に言語教育を行うことを主な目的としている。各コースへの児童の割合は、EM1

が17%、EM2が75%、EM3が8%となっている。

EM1とEM2の子どもたちは、英語と民族語の二言語を学年に適したレベルで学習する。EM1とEM2では、英語より民族語の学習において差がみられ、EM1ではEM2より高度なレベルの民族語を学習する。一方、EM3の子ども達は、基本的な英語と民族語を学習する。とりわけ、民族語は会話レベル(初歩的)と同等のReadingとListeningの理解知識、を学習する。なお特別なケースであるが、小学校5年でEM3の子どもたちの中でME3を選ぶこともできる。このコースは、原則として全ての科目は民族語で学習する。そして、民族語はハイレベルで学習し、英語は会話レベル(初歩的)と同等のReadingとListeningの理解知識、を学習する。

子ども達は、小学校6年修了時に、国家試験である小学校卒業試験(Primary School Leaving Examination = PSLE)を受ける。

試験科目はEM1、EM2が英語、民族語、算数、科学の4科目であり、EM3は英語、民族語、算数の3科

図2：ワークブック2年生(上)と教師の手作り教材3年生(下)

Name: _____ Class: _____ Date: _____

Unit
13
Hobbies

Can you guess their hobbies?

Look at the clues and write what these children's hobbies are. Use the following helping words.

table tennis chess reading
making music making things dancing

1 She has a and a .

Her hobby is making _____
music.

2 She has a and shoes.

3 They have a and .

4 He has a a and some and .

5 They have a two and a .

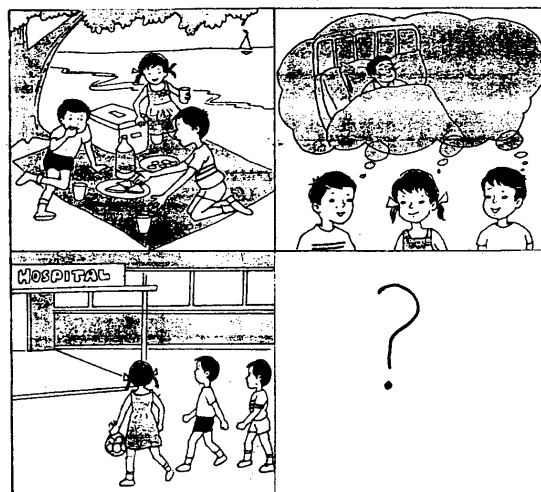
6 They have some and many .

Composition - Term 3 Unit 12

Elias Park Primary School
Written Expression

Name: _____ Date: _____
Class Primary 3H

Write a story base on the following pictures in about 120 words.



Words that may be used:

friends	beach	picnic	lonely
appreciate	remembered	enjoying	admitted in
kindness	visited	bought	showed concern
oranges	cheer		

目である。PSLEの結果によって中等教育での3つのコース、Special Course、Express Course、Normal Courseが決定される。

また、PSLEや小3終了段階において優秀な成績を修めた子どもたちだけの特権として、英才教育（Gifted Education）が受けられる制度もある。これは特定の学校で実施しているが、英語、算数、科学などに関してEM 1以上に高度な特別授業を少人数で行っている。

2-2. 小学校での言語教育の事例研究

シンガポールの小学校は義務教育ではない。また、保護者の教育方針で子どもたちの通う学校を選ぶことができる。学校は施設などの問題から、午前と午後と同じ教室を異なる学年が使用する2部制をとっている。しかし、最近、学校によっては午前中から全ての学年が始まる1部制のところもある。

小学校では、2 Semester制をとっており、1 Semesterは2 Term から構成されている。1 Termはそれぞれ10週間である。それぞれのTermの後にSchool Vacationが年4回ある。また、この他にNew Year's Day、Chinese New Year、Hari Raya Haji、Good Friday、National Day、Deepavali、Christmas Day等 国民の祭日も当然Holidayである。

2-2-1. Elias Park Primary School (11 Pasir Ris Street 52)

Elias Park Primary Schoolは、男女共学の国立小学校である。

この学校は2部制をとっていた。つまり、一つの教室を2学年で共有し、2・4・6年は午前7:25~12:55まで、1・3・5年生は午後1:00~6:30までの授業となっていた。

1学年は、学年によって異なるが、8~12クラスであり、1クラスの人数は約40人であった。クラスサイズとしては、日本では多人数と思われるが、シンガポールでは標準である。全児童数は2200人、教員数は86名という大所帯であった。民族語の授業以外は全て英語で授業がされる。したがって子どもたちは、小学校に入学するまでに日常会話はもちろん、教師が授業で話す英語を理解できるようにしておかなくてはならない。この学校を訪れた時、教育言語が英語であるので、授業はもちろんのこと、休み時間も含めて教師と子どもたちの会話は全て英語であった。また、国歌はマレー語であるが、School Songは英語である。

教室にはLanguage コーナーがあり、英語と華語のそれぞれの言語コーナーでは、子どもたちの作品などが各々の言語で展示してあった。

英語の授業はMinistry of Education検定済みの教科書English (MPH Education版)と教科書準拠のWorkbook (MPH Education版)を使用して、担任教師が教えていた。この教科書はReading が中心であるが、内容としてはReading、文法と会話の学習が含まれていた。さらに、Reading ComprehensionやWritingの学習の目的のためにWorkbookや教師の手作り教材が用いられていた。

いずれにしても、授業は「読み・書き」が中心であり、教科書の内容把握、作文、語彙の学習であった。

しかしながら、低学年ではActivityを取り入れ、子どもたちの興味・関心を引く授業であった。1年生の授業は歌とBig Bookの絵本を使用して教師がStory Tellingの授業を行っていた。言語材料は絵本に書いていない語彙であっても、子どもたちが日常生活で使用している既知の語があれば、絵本に載っている絵を指差しながらQ&Aの形で導入していた。

図3：コンピュータ教室での子どもたち（2001.8.28 筆者撮影）



2年生の授業では、Hobbyをテーマにした学習であったが、はじめに子どもたちの趣味を尋ね、IndoorとOutdoorの趣味に別けた。そして、それらの趣味に使う道具について子どもたちに質問し、そのリストをクラスで作成した。このように子ども達主体のワークショップ的なことを取り入れることによって、単調な授業が盛り上がり上がっていた。また、子ども達の実際の趣味を取り上げたことで、子ども達にとっては、より身近な話題となり、授業に興味・関心を強く持って取り組んでいた。

高学年の授業は、Reading Comprehension重視の授業であった。教科書の内容について、ワークブックや教師が作成したプリントを使用して問題を解いていた。多くは、Q & Aになっていたが、中には英作文形式のものや文法問題も含まれていた。

また、情報教育を推進しているシンガポールでは、コンピュータを使用した英語教育も積極的に行われていた。コンピュータは一人に一台は確保でき、全員が同時に使用できるシステムであった。30分が1コマの授業であったが、どの学年も2コマ通して1時間授業となっていた。教材は全てCD-ROMを使用したものであった。

1年生が行っていた授業は、絵本風の物語を読むことであった。はじめに、クラス全体で行なうために、教師が絵本の内容を大画面に映し出し、Big Bookの要領で「お話の読み聞かせ」を行なった。子ども達は全員黒板に映し出されたコンピュータ画面を見ていた。2ページ目から、教師は子ども達に自分で読むように促し、それぞれのコンピュータに向かわせた。子ども達はマウスのみを使用してその活動を行っていた。コンピュータ画面の内容を読み、読み終わると簡単なQ&Aを行い、正解率が高いと次の段階に進めるといったものであった。

また、読み物だけでなく、タイピングの練習も行っていた。この練習には、子ども達を飽きさせないように、ディズニーのマンガが動画に使われており、「もぐらたたきゲーム」風になっていた。背中にアルファベットが書いてあるタイプの穴から動物が出てくるのを見て子ども達がタイプし、正確に文字をタイプすると、その動物が穴に消えていくといった内容であった。これは一人一人の子ども達のコンピュータリテラシーのレベルや経験にあわせて、楽しくタイプの練習ができると思われた。

一方、5年生はコンピュータを使用して、長文読解問題を解いていた。これは、PSLEの準備として考えられる学習内容であった。すなわち、テスト形式に慣れるためや、自分の弱点を補強するために、子ども達が訓練を受けているような感じであった。レベルは日本の英語検定の準2級か3級程度で、子ども達が問題を解き、その解答と、問題を解くためにかかった時間が表示されるものであった。子ども達にとって、PSLEは将来を決める大切なテストであり、そのために5年生でも私語はなく真剣に学習に取り組んでいた。

このCD-ROM教材は能力別になっており、子ども達

は一人一人自分のレベルにあった教材を使用していた。間違っただけでは、何度も繰り返して行なえるので、そのレッスンをマスターするまで自分のペースで学習できることがメリットであると思われた。

Mother Tongueと呼ばれる民族語の授業においては、クラス担任ではなく、華語、マレー語、タミル語、それぞれ「語学の専任教師」である、ネイティブの教師が子ども達の授業にあたっていた。民族語はその民族の文化を保持するために必要な言語であるが、1回の授業につき1時間30分(3コマ分通し)も継続して学習していた。そのような授業が1週間に3~4回の割合で組まれていた。

子ども達は、それぞれの民族に分かれ、合同クラスで授業を受けていた。人数構成からいっても圧倒的に華語のクラスが多かった。また、公用語以外の民族語(例えばヒンディー語やバンガラ語)は学校では教師がいないので学ぶことができない。そのために、公用語以外の民族語をMother Tongueとしている子ども達は、その言語の補習学校で毎週土曜日の午後に、Mother Tongueの学習をしている。したがって、彼らは民族語の授業時間は、図書館で自習をし、補習学校で出された宿題を片付けていた。

ここでは学校の民族語の授業の内、華語の授業を述べる。教育言語はもちろん華語で行われる。したがって、この時間だけは原則として英語で話すことは禁止である。2年生の華語の授業は華語の歌から始まり、簡単な漢詩の読みを教師と一緒にいき、その後、教師が教える華語を筆写していた。華語を書くことが苦手な子ども達も多く、書き順を丁寧に教師が教えても、難しい華語の文字は書くことが困難な子どももいた。また、華語の授業中に、華語の教科書を使用して道徳教育も一緒に行われた。

2-2-2. ST. Anthony's Canossian Primary School (1602 Bedok North Avenue 4)

ST. Anthony's Canossian Primary School は女子校であり、国家補助校である。校長先生はSister Angela Ngというシスターであった。

クラスは各学年8~10クラスあり、クラスサイズは37~40人であった。この学校には、2,000人の子ども達が学んでおり、Primaryに併設してSecondaryもあった。

教師構成は、校長、教頭、担任教師が1年9人、2年8人、3年9人、4年8人、5年8人、6年10人と、Mother Tongueの教師が22人であった。教師は全て女性であった。

この小学校も2部制で授業が行なわれていた。英語の授業内容は教科書とワークブックを使用していた。この学校の特徴はMother Tongueの専任教員が多いことである。マレー語とタミル語の教員は民族衣装をまとうて授業を行っていた。彼女らは、授業での言語はもちろん民族語であるが、休み時間や打ち合わせ等の時は、教

師間では英語でコミュニケーションを図っていた。一方、子ども達とのコミュニケーションはどのような場合でも民族語で行なっていた。

英語の教科書は1・2年生はMinistry of Education検定済みであるLongmanのCelebrate Englishを、3年以上はCurriculum Development Institute of Singaporeが制作したEPB社のPrimary English Thematic Seriesを使用していた。この理由としては、2001年度はLongmanのCelebrate Englishは2年生までしか出版されていなかったため、3年以上の教科書は、それまで唯一教科書を出版していたPrimary English Thematic Seriesを使用していたと考えられる。

LongmanのCelebrate Englishは印刷が鮮やかであり、登場人物も生き活きとした表情で描かれている。内容はReading、Writing、Listening、Oral、Grammar、Vocabularyの力をつけさせることを目的としている。また、Workbookは一つのUnitに20のActivityが掲載されており、その内容はVocabulary、Oral、Writing、Grammar、Listeningであった。

1年生の授業では、英語の歌からはじまり、子ども達に教科書の絵を目で追わせながら、教師は教科書の文を読んでいた。その後、Workbookを使用して、色塗りやパズルなど遊び感覚の子ども達が主体である活動を行った。

4年生の授業では教育実習生が授業を行っていたが、試験に向けた授業内容であったにもかかわらず、実物教材やスクリーンを使用した英語の授業を行っていた。リスニングのために、テープを子ども達に聴かせていたのが印象的であった。6年生のEM1の子ども達の授業は「読解」中心であった。教師がプリントを準備していたが、これは過去のPSLEの問題から教師が選んで出題したものであった。内容把握の問題を、はじめに一人一人が解き、次にOHPを使用してこのプリントを映し出して、重要なポイントについて教師が解説を行っていた。

また、EM3の子ども達を対象にした5年生の英語の授業では、日常生活に必要な語彙を学ぶための学習を行っていた。子ども達は、市販の教科書は持っていたが、学年のレベルとは異なる学習内容となるので、教師が作成したプリントを使用していた。「病院に行くこと」をテーマにした内容で、文を読んでどの病院に行ったらいいのかを答えさせる内容のものであった。その後、ビデオを見ながら、英語学習を行っていた。

この学校では、英語の授業が遅れている子ども達のために、授業時間外に少人数で英語を教えるシステムもあった。語学専門の教師の中には英語専門の教師もいたが、彼女たちは、授業についていけない子ども達のフォローを個別に授業時間以外に行っていた。少人数で行なわれる特別レッスンでは、2部制のメリットが生かされた教育システムであると思われた。英語専門教師の中には自分の教室を持っている教師もいた。そこでは無味乾燥な

学習机と椅子のみといった教室の雰囲気ではなく、ポスターや絵本などの教材が多くディスプレイしてあった。

華語の授業では、1年生は教師が子ども達に絵本の読み聞かせを行い、次に華語の文字を書く練習を行っていた。最後に華語のカルト遊びを行い、グループで、習った文字についてのカード遊びを行っていた。3年生の授業では、プリントを使用して授業を行っていた。はじめに書かれている華語の文を黙読し、次に教師と一緒に音読して、教師の質問に答えていた。

この学校は宗教的な理由からであろうか、英語教育を重視していると思われた。子ども達は学校において、民族語の授業以外は友人同士のおしゃべり等も含めて、全て、英語でコミュニケーションを図っていた。

2-2-3. ST. Anthony's Canossian Primary Schoolの子ども達の言語使用状況アンケート調査

1) 調査の目的

この調査は学校生活において、英語を主なコミュニケーション言語としている子ども達の家庭における言語使用状況と、その結果がバイリンガル教育にどのように関係しているかを考察するために行なった。調査はアンケート形式で行なった。

2) 調査対象

ST. Anthony's Canossian Primary Schoolの5年生(1990年生)の華人家庭の子ども達78名 彼女たちの宗教はBuddhist 14名、Catholic 43名、Taoist 2名、無回答19名であった。

3) 調査日

2001年8月27日

4) 調査内容

華人の子ども達の言語使用状況と、英語、華語2つの言語に対してどのようなイメージをもっているかについて調査した。

5) 調査結果

本論文では紙面の関係上、1「家庭で会話するとき使用する言語について」のみ掲載する。(表2)

6) 調査考察

この学校の子供達は、学校だけでなく家庭での会話でも英語を使用していることが調査結果からも明らかになった。表3は華人家庭で最もよく話す言語についてCensusから抜粋したものであるが、5-14歳の年齢の子供達は英語よりも華語の方が頻繁に使用することが分かった。しかし、ST. Anthony's Canossian Primary Schoolの5年生の子供達の場合、祖父母との会話以外は華語よりも英語を用いる割合が高い。また、両親で比較した場合、父との会話の方が母との会話よりも英語が多く用いられている。これは、父親の方が母親の職場よりも英語使用環境が多く、そのために家庭でも英語の使用頻度が高いと考えられる。また、両親との会話において、華語は英語の

表2： 家庭で会話をするとき使用する言語 (人数)

(祖父母と)				(父と)			
	頻 繁	使用する	Rarely		頻 繁	使用する	Rarely
English	20	5	29	English	60	5	8
Mandarin	23	31	6	Mandarin	12	33	9
Dialect	28	17	10	Dialect	3	17	22
Malay	2	2	2	Malay	0	1	5
Others	0	1	0	Others	0	0	1
無回答	5	22	31	無回答	3	22	33

(母と)				(兄弟姉妹と)			
	頻 繁	使用する	Rarely		頻 繁	使用する	Rarely
English	56	12	5	English	49	9	1
Mandarin	18	31	10	Mandarin	8	33	2
Dialect	3	17	28	Dialect	3	2	27
Malay	0	0	5	Malay	0	1	4
Others	0	0	0	Others	0	0	0
無回答	1	18	30	無回答	18	33	44

(一人っ子は無回答を含む)

(伯叔父母と)				(いとこと)			
	頻 繁	使用する	Rarely		頻 繁	使用する	Rarely
English	53	14	5	English	62	9	2
Mandarin	14	29	11	Mandarin	10	41	5
Dialect	8	14	20	Dialect	3	4	30
Malay	1	2	3	Malay	0	0	4
Others	0	0	0	Others	0	0	1
無回答	2	19	39	無回答	3	24	36

表3：華人家庭で最もよく話す言語(年齢・言語別)(%)

年	Total		5-14		15-24	
	1990	2000	1990	2000	1990	2000
Total	100	100	100	100	100	100
Mandarin	30.1	45.1	57.6	59.6	28.5	59.8
Chinese Dialect	50.3	30.7	18.9	4.3	51.5	18.4
English	19.3	23.9	23.3	35.8	19.9	21.5
Others	0.3	0.4	0.2	0.4	0.2	0.3

Singapore Census of Population 1990, 2000 より筆者作成

次に高いが、華語方言を使用している家庭もあることがわかる。しかし、兄弟やいとこなど同年代の子ども達との会話では、英語使用の割合が高くなっている。

一方、祖父母との会話では華語より彼らの出身地の言葉である華語方言が一番多く、次いで華語、英語の順であった。これは祖父母の教育歴による結果であると考えられる。

3. 応用言語学の視点における二言語教育政策

現在シンガポールでは、教育言語政策として二言語政

策が行われている。華人の子ども達は小学校入学から英語を教育言語とし、華語はMother Tongueの一科目として、また、公民(道徳)の教育言語として学んでいる。このような教育形態は、Mainstream Bilingual Educationといわれており(Baker 1993)、地域の「多数派」言語(民族語)と国際的な言語(英語)の二言語を教育の媒体として使用することと定義されている。そして、その教育の目的としては、Enrichment bilingual education¹のプログラムを通じて、子ども達が二言語で読み書きができ、十分な言語能力を育成することである。

シンガポールの子供達は小学校入学以前から、幼稚園や保育園で英語と華語を学んでいる。また、日常生活

1 Otheguy & Otto(1980)によれば、バイリンガル教育は目的によって区別される。Enrichment bilingual educationは、子どもたちが家庭で使用する言語の技能を十分に伸ばし、多数派言語と国際的な言語の両方の言語の熟達度を高め、リテラシー能力を習得することを目的としている教育である。

においてはメディアや家庭、地域社会などの言語環境からも、英語や華語の言語を習得している。そして、彼らにとって、第一言語と第二言語に対する認識は英語、華語のいずれかであるが、ST. Anthony's Canossian Primary Schoolの調査でも明らかにされたように家庭によって使用言語の頻度が異なっているため、その認識は個人によって異なる。Lokeによれば、子ども達は教育だけでなく、コミュニケーションを図りながら言語を学ぶことを述べている。現在、英語で学校教育を受け、華語を第二言語で学んだ若い親世代が、子ども達を育てている場合が多く、子ども達には小学校入学以前に英語と華語を学ばせているが、一方、子ども達は遊びや友達との交流を通して言語を学んでいる、としている。そして、第一言語と第二言語に対する認識は、子ども達の言語状況によって様ではないことを指摘している(1997: 356~358)。

これらの理由から、二言語政策については、学校教育だけでなく、子どもが言語を習得する時の社会的な背景についても検討しなくてはならない。

子どものbilingualismには早い段階で同時期に二つの言語を習得した場合のSimultaneous bilingualismと、はじめに一つの言語を習得し、その後第二言語を習得するSequential Bilingualismの2種類がある。McLaughlin(1984,1985)は、この区別を3歳としている。すなわち、3歳以前には二つの言語習得は会話中心であり、自然に習得するので、教育を介さない習得となるが、3歳を過ぎると第二言語習得は(学校)教育による部分が大きくなるからである。シンガポールの場合は、Sequential Bilingualismの子ども達が多い。これは、正式な学校教育という手段と地域社会やメディアを通じた自然な方法でBilingualismの習得を行なっていると言える。

Sequential Bilingualismはその習得過程を考慮すると、第二言語習得の研究にも関係している。第二言語を学習する年齢と習熟度の関係は多くの研究者が議論しているが、Singletonは、子どもの第二言語習得について、言語が獲得、保持、喪失されるのは社会的contextに関係することを述べ、幼児期に第二言語を学ぶ方が、成人で学ぶよりも容易に新しい言語の音韻体系や文法を習得でき、熟達度の高いレベルに到達する傾向があるとしている。また、第二言語教育を受けた時間も学習の成功度には重要な要因となり、第二言語教育を早期(小学校)からはじめ、その後継続して行なっている子どもの方が、学年が進んでから教育を受けた子どもより高い習熟度を示す、としている。そして、早期から第二言語を教えるためには、第二言語研究以外の分野の理論的根拠、すなわち、一般的な知的刺激、現代語を教えることのカリキュラム上の価値、二文化主義の利点、言語を学ぶ利点が必要であり、このような見地から、できるだけ長期にわたって学習をする方が効果的であること、さらに、小学校での第二言語の教育は、言語教育に携わる教師の適切な配

置、適当な教材と方法、親と教師の姿勢、そして何よりも教育を受ける子ども達に対して、学習は楽しいものだと思うさせることにかかっている、と述べている(Singleton 1989)。

シンガポールの子ども達の言語教育について、Singletonの理論を考察すると、言語の獲得、保持、喪失には社会的なcontextが重要であるということから、言語環境は第二言語習得には相応しいと言える。また、第二言語教育はほとんどの子どもが幼児期(3歳前後)から始めて16歳まで行なう。したがって、幼児期に第二言語を学び、継続して長期的に学習を行なっているため、熟達度の高いレベルに到達する傾向が高いということも考えられる。

また、第二言語研究以外の理論的根拠としては、社会的な背景により、政治的、経済的、文化的な要因から言語を学ぶことの意義が認識できる。そして、子ども達の言語教育は国の唯一の教員養成機関で、Ministry of Educationの直轄であるNational Institute of Educationにおいて教育を受けた教師が子ども達の指導にあたっている。筆者が参観した2つの学校での授業では、内容や進度にはあまり差がなく、国家の統一化された指導が行き渡っていると思われた。また、言語教育の視点から考察すれば、授業内容は、教師の言語的、文化的な知識を子ども達にInputすること、子ども達に学習内容を理解させ、彼らの考えをOutputさせる能力を習得させること、学習者中心でTaskを行なうことを基本にした授業であった。とりわけ低学年では活動中心の言語教育であったので、子どもたちが積極的に授業に参加していた。

さらに、家庭における保護者の姿勢としては、第一言語と第二言語の教育に対して熱心な場合が多く、小学校入学以前の言語教育について、家庭での取り組み、保育園や幼稚園での取り組みにおいても、筆者が参観する限りでは小学校と同じポリシーで行なわれていると考えられる(高橋 2001)。Sequential Bilingualismはシンガポールにおいては、政府の言語政策によって行なわれているものであるが、現在はSingapore Census of PopulationやST. Anthony's Canossian Primary Schoolの調査にも見られるように、家庭においても英語、華語の使用度は高く、一応は成功しているといえる。

しかしながら、この教育は子ども達にとって学習に対するかなりの負担やプレッシャーがかかり、一部の子どもにとってはBilingual教育のために、二言語での読み書き能力のレベルが上らず、学業不振に陥る場合もある。

Cummins(1976)とSkutnabb-Kangas and Toukomaa(1976)は、早期Bilingual教育を受けた子ども達の認知とBilingualの関係において、認知能力の達成度を説明するThreshold Theoryを提唱している。これはbilingualの認知能力と言語能力が一定の基準に達した場合にBilingual教育は成功するということである。彼らは

Bilingualの子ども達をレベル別に3段階に分け、それぞれ、下位・中位・上位レベルとした。そして、同年代の子どもと比較して、現時点での両方の言語の能力が不十分か、相対的に未熟な子どもを下位レベルとし、両言語における能力が低い場合の子ども達のレベルで、認知的にマイナスまたは有害な影響があるとしている。例えば、学校でどちらの言語によってもうまく対処できない子どもは、情報のやり取りに不都合が生じると考えられる。また、両方ではないが、どちらか一方の言語では年齢相当の能力を持っているものが中位レベルに入る。例えば、学校で片方の言語のみを流暢に操っている子ども達がこのレベルに当てはまる。これは部分的なBilingualであり、monolingualの子どもと認知的な差異はほとんどなく、monolingualに比べて認知上プラスやマイナスになる影響は受けていないと思われる。英語で教育を受け、英語で物事を考え、華語は簡単な日常会話程度である場合はこのレベルに入る。

上位レベルは、ほぼ「均衡」Bilingualといえる子ども達が入る。このレベルの子どもは2つ以上の言語で年齢相当の能力を持っている。この様な子どもは、自分の使えるどの言語の教材にも対処することができる。Bilingualismによって認知的にプラスの影響が現れるのはこの段階である。

シンガポールでは、4年生修了時にEM1、EM2、EM3といった振り分けが行われるが、これは、英語と民族語の成績が三分の二を占めており、Threshold Theoryにおいての下位レベルがEM3、上位レベルがEM1という考え方もできる。Cumminsの理論から考察すれば、この振り分けを行うことによって、子ども達の言語能力や認知能力に見合った早期bilingual教育を行っていると言える。

4. おわりに

シンガポールのBilingualismは、国家の言語教育政策の下で実施されている。シンガポールの言語政策の歴史を振り返ってみると、国民の学習能力を考慮しながらも、国家統一を前面に押し立て、英語重視のBilingual教育を主流として行なってきた。とりわけ華人社会においては、出身地と人々のアイデンティティに繋がる華語方言の存在、そして、華語と英語の二言語習得に対する子ども達の負担が問題とされた。政府は民族としての華人のアイデンティティや言語、文化を維持するためにあえて、英語と華語の二言語政策を採択してきた。

現在、シンガポール華人たちは言語を個人的資源として考えている。すなわち、グローバル化にとまどない、英語と華語の二言語を流暢に操れることは、人的資源として経済的、文化的に重要であると考えている。したがって、子ども達のBilingual教育に対しても非常に熱心で、保護者や教育関係者たちは、早期Bilingual教育にも力

を注いでいる。また、Bilingual教育におけるCumminsの理論では、認知発達と言語能力の関係について言及されているが、シンガポールの言語教育政策は、彼の理論が反映された教育制度であると考えられる。

しかしながら、言語が単にコミュニケーションの手段だけではなく、個々人のアイデンティティや文化、また地域やより大きな共同体へと社会化することの手段でもあるということから考察すれば、二文化主義や多文化主義の視点からBilingual教育をさらに考える必要がある。

引用文献

河部利夫(編).1978.『東南アジア社会文化辞典』
東京堂出版.

参考文献

- 情報文化省編 “SINGAPORE 1990”
 小木裕文.1995.『シンガポール・マレーシアの華人社会と教育変容』.(株)光生館.
 高橋美由紀.2001.「シンガポール華人における言語と小学校入学前の言語教育」.中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要第3号.
 田中恭子.2000.「複合移民社会の国民統合—シンガポールの場合」.西川長夫、他(編)『アジアの多文化社会と国民国家』.人文書院.
 Baker,C.1993. *Foundation of Bilingual Education and Bilingualism*. Clevedon : Multilingual Matters.
 Cummins, J. 1976. The influence of bilingualism on cognitive growth : A synthesis of research findings and explanatory hypotheses. *Working Papers on Bilingualism* 9, 1-43.
 Cummins, J. & M. Swain.1986. *Bilingualism in Education: Aspects of Theory, Research, and Practice*. London: Longman.
 Loke, K.K. 1997. Chinese Singaporean Children and Their Bilingual Development in pre-school Centers. Gopinathan,S. et al. (ed.) *Language, Society and Education in Singapore: Issues and Trends*. Times Academic Press. Singapore.
 McLaughlin, B. 1984. *Second Language Acquisition in Childhood. Volume 1 : Preschool Children*. Hillsdale, N J: Lawrence Erlbaum.
 McLaughlin, B. 1985. *Second Language Acquisition in Childhood. Volume 2 : School Age Children*. Hillsdale, N J: Lawrence Erlbaum.
 Ministry of Education. 2001a. *English language Syllabus 2001 for Primary and Secondary Schools*. Singapore Ministry of Education.

- Ministry of Education. 2001b. *Education Statistics Digest 2001*. Singapore Ministry of Education.
- Ministry of Education. 2002. *Directory of Schools. Educational & Institutions 2002*. Singapore Ministry of Education.
- Ministry of Education in Singapore. 2002.
<http://www1.moe.edu.sg/>
- Otheguy,R. & Otto,R. 1980. The myth of static maintenance in bilingual education. *Modern Language Journal* 64(3), 350-356.
- Pakir,A. 1994. 'Education and Invisible language Planning: The Case of Englishin Singapore', in Thiru K. & J.K-Terry (ed.). *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution*. Singapore: Times Academic Press.
- Singleton, D. 1989. *Language Acquisition: The Age Factor*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Singapore Department of Statistics. 1957. 1970. 1980. 1990. 2000. *Census of Population*
- Skutnabb-Kangas and Toukomaa,P. 1976. *Teaching Migrant Children Mother Tongue and Learning the Language of the Host Country in the Context of the Socio-Cultural Situation of the Migrant's Family*. Tampere, Finland: Tukimuksia research Reports.
- Tan,J., S.Gopinathan & H.W. Kam 1997. *Education in Singapore*. Prentice Hall. Singapore.